

## 自己評価報告書(最終報告)

報告者

生活・健康系コース(技術・工業・情報) / 畑中 伸夫

## ■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

## Ⅰ. 学長の定める重点目標

## Ⅰ-1. 教育大学教員としての授業実践

本学の目的は、豊かな教養と教育実践力をもった教員を養成し、学校現場に送り出すことにある。このことを実現するには、教科専門・教科教育・教職専門等の各分野の授業が、学校現場の実践と関連性が保たれていることが必要である。あなたは、教員養成大学の教員として、本年度はどのような授業計画を立て実現しようとするのか、これまでの取り組み状況を総括し、具体的に示して欲しい。

## 1. 目標・計画

- ①H22年度着任ということもあり、担当した専修専門科目においては、いわゆる当該科目の専門性を深く・広く理解させることを重視してきた。
- ②しかし、授業を進めながら学生の将来にとって、当該授業がどのように有益であるのか、学生が当該科目を履修・修得したことによって、学生の将来の教育実践に役立つのか疑問をもっていた。
- ③H23年度においては、学部と修士課程では少し異なるが、関連する教育内容が小・中学校や高等学校でどのように扱われているのか研究に努める
- ④研究の結果を授業に反映させ、授業中においても小・中・高校の授業で当該分野をどのように児童・生徒に指導するかを指導することにより関連性が保たれた授業とする。

## 2. 点検・評価

重点目標が指摘する様に個々の教科専門の授業が小・中学校等の学校現場の実践に関連付けられていることは教員養成大学として重要である。中間報告にも記述したように、前期においては、学部エネルギー変換工学の授業において、熱力学に関係する内容が主に中学校における技術のエネルギー分野でどのように扱われているかについて授業で取り上げ、資料を提供し、学生と議論を行い相互に認識を深めた。後期においても学部数値流体力学において、水の持つ位置エネルギーや運動エネルギーについて、中学校の技術科および一部理科においてどのように扱われているかについて授業で取り上げた。教科専門の立場からは、学校現場における教科教材の展開を大学のレベルすなわち高いレベルから眺めて学習させることに留意して授業を進めている。

## Ⅱ. 分野別

## Ⅱ-1. 教育・学生生活支援

## 1. 目標・計画

- ①2年生担任として、学生が「中だるみ」にならないよう留意し、有意義な学生生活をおくれるよう援助する。学生の不調を早期に発見し、関係機関と連携を取りながら、立ち直りを支援する。
- ②学生と日常的な接触を意図的に追及する。前期は担当する授業があるが、後期は学生と定期的なミーティングを企画する

## 2. 点検・評価

日常的に学生と交流を図ることにより学生生活の支援を行ってきた。その効果を定量的に評価することは困難であるが、不調を生じる学生もなく、クラスの学生は順調に2年間を過ごしてきた。現在は、在学中の最大の取り組みである「教育実習」に向けて意欲の向上を図っている。教職へのロマンと現実の実力をともに確固たるものにするために指導を続ける。この手段として、「学習キャリアノート」が活用できないか検討中であり、H24に向けて取り組みたい。

## II-2. 研究

### 1. 目標・計画

①専門分野である「塑性加工」に関する研究を継続して進める。研究成果を、1～2報、学術論文として発表する。  
②科学研究費をはじめ、科学技術振興機構(JST)など外部資金の獲得に努力する。  
③教育大学の教員として、中学校:技術科教員、高等学校:工業科・情報科教員の具備すべき知識・技術について研究を進める。そのため、全学的に取り組まれている「教員養成に関するモデルカリキュラムの作成に関する調査研究」に積極的に参加する。

## 2. 点検・評価

学術論文は、10月と3月に掲載されH23年度中に2本が掲載された。この間取り組んできた研究活動が評価され、軽金属学会から学術功績賞を受賞した。外部資金の確保については、科研費を初めて獲得した。金型技術振興財団からの助成をH24年度獲得した。軽金属奨学会からは、引き続き助成金を獲得した。

## II-3. 大学運営

### 1. 目標・計画

①全学的な学校改革の取り組みに積極的に参加する。H23年度就任予定のコース長として、これらの取り組み(モデルカリキュラム、インターネット大学院等)を具体化しコース内で提案・推進する。  
②2年目の大学院教務委員会委員として、本学の運営に貢献する。

## 2. 点検・評価

コース長として大学院教務委員として全学的な取り組みに協力した。着任2年目の未経験からくる不十分さについては、コースの同僚等の援助により克服した。

## Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

### 1. 目標・計画

- ①附属学校教員(特に中学校技術科教員)と連携を深める. その中で, 教材・教具の改善・開発を卒業研究配属の学生を含め取り組む.
- ②産学・産官学連携の研究・製品開発に取り組む. また, 地域からいらいがあれば「出前授業」等を積極的に実施する.

### 2. 点検・評価

附属中学校技術科教員と連携を深める. 教育実習, 研究会, 教育実践フィールド研究の取り組みの中で連携を深めた. その中で, 教材・教具の改善・開発を卒業研究配属の学生を含め取り組んだ. H23年度の取り組みの到達点は完全ではないが, 今後に向けての基礎をきずくことができた.

## Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)